

平成23年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

秋の七草に見る草原性動植物の危機

「秋の野に 咲きたる花を ^{および}指折り かき数ふれば ^{くさ}七種の花」、「^{はぎ}萩の花 ^{おぼなくずばな}尾花葛花
^{なでしこ}瞿麦の花 ^{おみなえし}女郎花また ^{ふじばかま}藤袴 ^{あさがお}朝貌の花」。これは、山上憶良が詠んだ一対の歌として、
万葉集に出てきます。「秋の七草」はこれに由来しています。萩はヤマハギ、尾花はス
スキ、葛花はクズ、瞿麦はカワラナデシコ、女郎花はオミナエシ、藤袴はフジバカマ、
朝貌はキキョウのことであろうとされています。

歌に詠まれるくらいだから、昔はごく身近に見られる植物だったのでしょう。ところが、
今ではカワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウの4種はほとんど見か
けることはありません。「東京都の保護上重要な野生生物種～東京都レッドリスト～」
が改訂され、2010年版が発行されましたが、この4種とも絶滅危惧種として取り扱
われています。なお、「東京都レッドリスト」は東京都環境局ホームページからダウン
ロードできます。また、フジバカマは圏央道工事の際に多摩川右岸の河原で発見され、
この株の種子から育てた子孫が吹上しょうぶ公園や友田レクリエーション広場の川岸に
植えられていて、9月後半の開花期には見事に咲いています。吹上しょうぶ公園ではキ
キョウの花も見ることができます。

カタクリやニリンソウのように春咲く植物は、藪さえなければ林の中でも生育できま
す。落葉広葉樹林は冬に葉を落とし、芽吹いたばかりの春先はまだ林床に陽が射し込む
ので、青葉が茂り林の中が暗くなるまでの短い期間に、せっせと栄養を貯めて生長しま
す。ところが、上記の4種やアザミ・リンドウなどのように秋咲く植物は、初夏には林
の中が暗くなる樹林の中では生育できません。

江戸時代の検地図を見ると、山は樹林ばかりではなく各所に草地の印がたくさんあり
ます。村落の共有林として利用されていた^{まぐさば}秣場です。ここでは屋根葺き用の茅や焚木用
の粗朶^{そだ}が採取され、草原状態が継続的に維持されていました。秋咲き植物はこのよう
な環境に育ち、分布を広げてきたと思われます。屋根が茅からトタンに置き換わり、昔の
茅場はなくなりました。しかし、以前の薪炭林は約20年周期で繰り返し伐採しながら
更新されていました。小丸太生産が主の青梅林業では植林されたスギも40年くらいで
伐採されていました。茅場はなくなっても、次々に出来る伐採跡地が伐採後5年くらい
まで草原環境を提供してきました。このような場所で秋咲きの草原性植物は存続してき
ました。草原性や疎林性の昆虫や、哺乳類ではノウサギなども同様です。

ところが、1960年代に薪・炭から電気・石油へのエネルギー転換が進み、薪炭林は伐られなくなります。その後、安い外材に押されて林業は厳しい環境にさらされ、人工林も手入れがされなくなり、伐採もされなくなります。こうして、いま青梅の山は人工林か広葉樹薪炭林かを問わず樹齢50～60年の樹林に覆われ、山を歩いても明るい環境がなかなかありません。草原性の動植物は居場所がなくなり、絶滅が危惧される種が数多く出ています。

近年、「生物多様性保全」が大きく取り上げられていますが、環境として最も減少しているのは草原環境であり、種の多様性にとって危機にあるのが草原性動植物です。林を伐採して木材を資源として利用する人の営みが再構築されることが問われていると思います。森林を資源として持続的に利用するために、順次伐採し、伐採跡地の草原環境を含めて林齢の異なる森林がモザイク状に形成され循環することが、生物多様性保全にとっても最大の課題になっています。

(文責 久保田 繁男)